
in plastic bag

エイノジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

in plastic bag

【Zコード】

N7917Y

【作者名】

エイノジ

【あらすじ】

とある火曜日。

設楽はマンションの下にゴミを出しに行くと、袋に入った成人男性を見つける。

このままでは燃やされる、マズイと思った設楽は自宅に持ち帰る。仕事から帰宅した設楽は人間とは思えないゴミに手を焼くが、次第に愛情が湧いてくる……

? (前書き)

設楽統…保健所に勤める28歳。好奇心が強く、またドS。

有吉弘行…設楽のマンションのゴミステーションに捨てられていた「」。27歳。

自己は犬だと催眠がかかつていてる。

日村…設楽の同僚。設楽とロッカーが隣。テンションが高く、親しみやすい。

小木…冷静で淡白。矢作が好き。現在矢作と同居中。

矢作…動物と小木が好き。多少のホモツ氣がある。

?

早朝、今日は火曜日だから燃えるゴミの日。

家の紙くずと生ゴミを集め、一つの大きな袋に纏める。汚れないように捲り上げた袖。

だぼつとしたスウェット。

すぐに脱げるサンダル。

まだ整えていない髪を搔き上げながらマンションのゴミステーションに行く。

既に数個の塊があった。

ネットを持ち、俺のゴミも入れようとした瞬間、見慣れた形が半透明のビニールに包まれて置いてあった。正確には捨てられていた。

体育座りした成人男性が眠っている…ように見える。

事件だと俺は即座に思ったが、怖いもの見た目に、持っていた袋を置き、頬に触れてみる。

「あ…っ」

生きている。

ビニール越しに体温が指に伝わった。

「ちょっと待てよ…。今日は火曜日だろ? ということは燃えるゴミの日であって、更に俺はここにゴミを捨てに来たんだ」

俺の持ってきたゴミはやがて収集車が来て、焼却炉にぼーんだ。コイツ、骨だけになるぞ。

生きたまま燃やされるとか、熱いじごりの騒ぎじゃねえって。

「よいしょ…っと……

意外と重いのね。

持ち帰ったのはいいけど、俺誘拐罪とかで捕まらないよね？

「俺が誘拐犯ならコイツは露出魔つてところか」

ゴミ袋に入ったパンツ一丁の青年（とこうじゆうねんをとつすがめてこむ）を解放した。

傷が所々に入つていて、でもそれ以外に不審なところは何もない。

「いやでも捨てられてたよなあ」

あ、ヤバイヤバイ。

仕事に遅れちゃう。

青年をソファーに運び、着替えて髪をセットして出でいった。

知らない人を家に置いとくなんて無用心かもしないけど、その人だつて知らない家に居るんだから、ビビって何も出来ないよね。

「おざまーす」

「おお」

俺が着いた時には小木さんと矢作さんはもう居て、一人とも煙草をふかしながら雑談に勤しんでいた。

軽く手を上げて挨拶を交わし、俺はロッカーに着替えに行つた。隣のロッカーの田村さんからゴミユニーケーションを取つてきた。

「あれ設楽さん遅かったね」

「うん。今日ゴミ出しの日だったから」

「え、何それ。ゴミ出すのに何分掛けてんの」

捨てるだけじゃなかつたからね。

まさかゴミを捨てに行つて、拾つとは思わないでしょ。

「あ、もしかして捨ててあるもの拾つたとか？そりでしょ、絶対そうだ！」

「いや、まあ拾つたといつかね……」

勘が鋭いんだから。

「ちょっと待つて。俺が当てるね。大きいものでしょ……」

「うん、まあ…大きいものかな」

「じゃあねえ…家電だ!! そうでしょ、しかもスピーカー系じゃない?」

「いや、違うな…」

「大きくて家電で、スピーカー系じゃないとなると…」

いやいや。

「あの、田村さんちょっとといい?」

「ん? 何? あ、答え言っちゃダメだよ?」

「あ、そうじゃなくてね。家電じゃあ、無いんだよな」

「えつ? 大きいものつて…家電、」

「大きいものとは言つたけど、家電とは言つてないからね。それに今日火曜日じやん」

「うん、火曜日だよ」

「火曜日つてことは、燃えるゴミの日だから、家電とかの粗大ゴミは出しちゃいけないから」

不思議な顔（言い方に語弊がある？ 気にすんな）をしていた田村さんは理解できたようだ。

「あー、そう言えばそつだよね。成程ー。じゃあタンスとか? タンスも燃やさないかなあ、と思つたところで仕事が始まるベルが鳴つた。

俺の仕事は保健所の、主に動物保護。

地域住民の方から苦情とも取れる連絡があつた動物を一時的に保護している。

一定期間待つても飼い主とか現れなかつたら、惨いけど殺したりもする。

でも、何でもかんでも殺したりしないよ。

最初は気持ち悪くて吐いてたけど、人の慣れって恐ろしいね。

そういう仕事があつた晩でも焼き肉食べたりするもん。

「おーよしよし、小木は可愛いねー」

また矢作さんの“小木ペット”が始まった。

保護した野犬達に朝ご飯を与える時、小木さんが矢作さんに思いつき甘える（動物に嫉妬か？）。ほんと気持ち悪いくらいに…。

「小木は可愛いねー。ほんと食べちゃいたいよ」

昔はこれにも吐きそうになつてたけど、人間の慣れつて怖いですね。

「おい、食べな」

小さなケージに大きな体を丸めてうずくまるドーベルマン。

ここに来てから丸2日。何にも食べちゃいない。

スレンダーな体が貧相にさえ見える。

「食べなきや死ぬよ」

ドーベルマンなんて捨てる飼い主、信じられないよ。

こんな恐ろしい目をした犬、責任持つて最後まで育ててくれなきや、拾う身にもなつてみろってんだ。

「俺の飯食うくらいだつたら死んだ方がマシだつてか？」

なあ、いつまでも意地張つてんなよ。

?

「ふー」

今日も一日頑張りました、と。

玄関を開けるまですっかり忘れてたよ。朝拾つたもののことを。泥棒にでも入られたのかと思っちゃうくらい散乱した部屋に、思わず通帳と印鑑を確認した。

「あつた。良かつた…」

大した額も入つてないが、折角貯めてきたんだ、盗られて

『う、う…』

「え？…うわあつー！」

我ながら情けない声が出た。

「ちょっともう何…、っー！」

今朝拾つたゴミが襲いかかってきた。

あのまま放置されてたら今頃死んでんだよ?ことは俺、命の恩人じやん。

何飛びかかつて来てんの。

「ぐう…」

威嚇?

敵意丸だしにされちや、近づこうにも迂闊に手を出せない。

敵意どころか、アレまで丸だしなんだけど。家出る時にはちゃんと穿いてたよね、パンツ。

「あのね。敵じゃないんだ」

「ぐう、あ、あー！」

「ちょっとちょっとー言葉通じてないんだけどーー！」

「ああもうバカ…」

正面から真っ向勝負を挑んできた「ミ」を受け止め、誠にダサいが押し倒された。

「ミは俺の首に顔を埋めて、しつこいオイを嗅いで、舐めた。肩と腹を押さえつけられて動けない。

どんな腕力してんのね。ビクともしない。

「あのー…」

チンコが思いつき当たつてますが。

「うひ…気持ち悪い。」

「あれ…え、」

わざきまで敵意剥き出しだつた「ミ」が退いた。

そのままヒョコヒョコと歩き、ソファーに跨がつた。

三人掛けの白色に悠々と身を沈める。

「ちょ、ちょつと向してくれてんの。全裸はヤメテよー。」

「ふあー」

寝るのかせめて服を着ろ…！

全然言葉通じねえじゃん、何コイツ、ムカつく…！

仕方なしに「ミ」に近づいて叫ぶ。

「俺、お前の命救つてあげたんだけど。お礼へりて言ってくれてもいいんじゃないの？」

「ミはどこか小さな王国の王子のような態度と流し田でふうん、と鼻だけで音を鳴らした。

どうやら喋れない様子だ。

「お前ね、ありがとうございますって言えない…。」

「ああ、何だ。」

「何で俺を見るんだ。」

吸い込まれそうな瞳、とでも言おうか。因みに1200%美化での話で。

やめろ、俺をそんな目で見るな。

「……どうしてこのつまるんだよ」

「どうもこの『ゴミ』、馬乗りが好きみたいだ。

俺のお気に入りのソファーもそこそこに俺に覆い被さった。

日本のどこに、『ゴミ』を腹の上に乗せて喜ぶやつがいるものか。

「あの、退いてくれないかな？」

さつきから言葉は通じないと分かっつてこるのに、いつこう時は、人は聰明になれない。

「あの、あのね…」

聰明どころか言葉も出ない。

右手に辞書を持っていたとしても不可能だ。

何故なら俺の右腕は『ゴミ』の太ももの下敷きになつていいらだ。

拾わなきゃ良かった

と、一瞬考えたが、それは死んでも言つちやいけない。

俺が拾わなきゃ死んだ世界では誰も拾わない。

拾われなけりやこの『ゴミ』、今頃泣いても戻らない。

しかしこの『ゴミ』、幸せそうに眠るね。

『ゴミゴミ』って、名前でも付けてやらないと不便かな。

「あら俺つてば、愛着湧いて来てんじやん
ああもう最悪。

?

「寒い……」

朝田覚めるとゴミの姿は無く、これが夢だつたら良いのと思つた途端、キッチンの方が何やらゴソゴソ動く。また泥棒かと一瞬は頭を過るが、どうせアノゴミだらうと、重い体を持ち上げ物音のする方へ向かつた。

昨日の片付けも済んでないのに、これ以上散らかされでは困る。

「なあにして……」

「ゴミに常識もとやかく言つても仕方ないけど、これは酷すぎや。どこの人間が生の即席麺を食べますか、いいえ食べません。食べるとしたらそれは人間ではありません。ゴミです。」

「そうか、だからコイツはゴミなのか。」

「お前ね、ふざけるのも大概にしてくれるかな」

買った時のままビニール袋に入っていた即席麺（厳密には醤油ラーメン）のフィルムを破き、開き口が丁寧な示されているのに無視して真ん中から穴を開けた。

お湯でふやかされる前、塊の麺をバリバリ音を立てて齧る。

「行儀悪いから止めろって言つてんのが分かんねえのかよ……」

夢中になつてこるゴミの髪の毛を掴んで無理矢理剥がす。

「グうああ！－！」

逆ギレしてんじゃねえよ。

「勝手に食べません。分かったか？」

「あー俺将来いいパパになれそう。やっぱ止めだ。」

こんな子供欲しくない。

俺は「ミミ」「いつくん」と言ひ名前を付けた。

犬の「いつくん」。

「ミミの次は犬が、聞こえは悪いけど一応ヒトの形してるからそれなりの扱いはしてやるわ。

「矢作さんちーす」

「ちーすじやねえだら。お前遅刻だら」

やー、ギリギリセーフじゃないつすかあ?とか誤魔化しながら“小木ペット”の時間が終わつた二人の間を通り、ドーベルマンの前に立つ。

貧弱になつた体はげつそりといつ表現が似合つ。

朝飯を出してもまだ動かない。

これで3日目だ。

そろそろ限界を越えているはずなのに、まだ自分に鎖をかけて人間からのエサを食べようとしている（実際に動きを封じてるのは俺たちの方なんだけど）。

俺たちの何がいけない。

捕られたことが気に食わなかつたのか？保護しただけだぜ、安心してくれよ。そう簡単には殺したりしないし、飼い主が申し出ればすぐには帰してやる。

まあ飼い主が来そうにないのが問題なんだけど…。

「設楽さん…何ブツブツ言つてんの？」

「あ、田村さん…「イツ全然食べないのよ」

ドーベルマンは低く伏せたまま急に現れた田村さんの姿を田だけでも追つた。

「ああほんと、俺の贋肉あげたいくらい」

なにそれつまんない、と。

昔こいつやって一人してアリの行列見たよね、と。

この仕事始めてすぐくらいだつたつけ。
働いてるなーって、偉いなあつて。

働いてるなーって、偉いなあつて

その後のら猫を触ろうとしたら田村さん引つ搔かれて、仕事辞めてやるー俺は動物に好かれてないんだーって叫んでたよね。
結局辞めずに働いてるね俺たち。

「なんか、生きてるつてす」いよね

二

生きていることがすごいと感じたのはお互いだから、結局どちらが言ったよかっただ。

「生れてもうか」「……」

だからこの俺の言葉が反復なのか、オウム返しなのか、そんなもの
こ意味は無い。

意味があるのは生きてるってことだから……

「辛氣臭え！！」

檻の中に閉じ込められた気高き犬を目の前にして俺たち、スケールのデカ過ぎる話して、

黄昏るのが気持ち悪くて、田村わんの腹中、思ひつからず平手で呪いついた。

うん。期待通りのいい音。

本人は痛そうだけど……

「あ、立つた…」

「何が！？クララが？」

道
一
〇

クララ以上の感動かもしれない。

煩く騒いだせいか、ドーベルマンは耳をポンと立て、背筋を伸ばして堂々と立っていた。

そのまま俺の差し出したエサに口を付けるまで、時間はからなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7917y/>

in plastic bag

2011年11月23日17時48分発行